

SADA

SAKAI DESIGN ASSOCIATION

堺デザイン協会

No. 9

昭和63年9月30日



阪神高速道路湾岸線

1990年代デザイン基本方針公表

通産省の諮問機関、輸出検査及びデザイン奨励審議会デザイン奨励部会（部会長、長村貞一・日本産業デザイン振興会会長）は、このほど「1990年代のデザイン政策」と題する中間答申をとりまとめ、公表した。（63.3）

デザイン政策に関する諮問、答申が行われたのは、昭和47年以来16年ぶりである。

第1章「今日におけるデザインの概念及び意識」から、第4章の「1990年代に向けたデザイン政策への展開」へ流れる構成は、時代状況の大きな転換を意識したもので、従来の答申のスタイルから一歩踏み出そうという意欲的な姿勢が特色。その新しい展開のポイントとしては、①デザインインフラの整備。②グランドデザインの推進。③デザインを通じた国際交流の充実。また当面の課題として①'89デザインイヤーの提唱、②産業政策措置におけるデザインへの取り組みの強化、が挙げられている。

「'89デザインイヤー」の運動については、既に日本産業デザイン振興会等で1年余りにわたる準備が進められて来たが、答申発表と合わせて、同運動への支援、協力を進めていくことが通産省として正式決定された。

本誌では、誌面の都合で答申の第2章、「デザイン活動の現状」第3章「デザイン振興の課題」を省略しましたが、必要な方がおられましたら、コピーをお渡し致します。事務局までお申し出下さい。

1990年代のデザイン政策中間答申(抄録)

昭和63年3月輸出検査及びデザイン奨励審議会

(はじめに)

我々が通りすぎていく「生活シーン」のひとつは、良かれ悪しかれいろいろな「デザイン」でみちあふれている。我々は、このようなデザインに接したとき、無意識のうちに通りすぎるときもあれば、魅せられるときもある。また、むせかえるような息苦しさを覚えるときもある。

今日、我が国は経済的な豊かさを享受するに至ったが、ふと身の回りを見渡したとき、この「生活シーン」の雑然とした調和のなさに気づくことがないだろうか。

デザインは、人々の生活の中に生きている音楽に譬えることもできる。「美しく」、「躍動感あふれ」、「調和のとれた」音楽が人々の「心」を揺り動かすように、優れたデザインは人々の「心」をなごませ、明日への希望を培う。

このようなデザインの意味がいま人々の「心」に宿りはじめている。

他方、我が国産業経済は、国際化が急速に進む中で「ソフト化」、「サービス産業化」等激変の渦中にある。この中で、我が国産業は、創造性の発揮による産業活力の維持が求められている。

また、「東京一極集中の排除」及び「多極分散型国土の形成」の観点から、地域活性化の要請がかつてなく大きい。

国際的には、我が国の世界経済に占める比重の増大と国際経済社会の相互依存の高まりの中で、我が国は、従来にも増して国際社会への貢献が求められている。

このような我が国産業社会の新たな潮流の中で、知的創造活動の活性化及びこれを通じた交流の推進が期待されている。かかる中、知的創造活動の所産であるデザインの重要性が高まっている。

本審議会は、このような認識の下に、昨年9月通産産業大臣から諮問を受けた「1990年代のデザイン政策のあり方」について検討を進め、ここに、問題の所在と解決の方向を中間的にとりまとめた。

本審議会としては、本答が、デザインに係るすべての関係者をはじめ広く国民各分野の理解と支持を得て、着実に実行に移されることを強く希望するものである。

〔目次〕

第1章 今日におけるデザインの概念及び意義

1. 今日におけるデザインの概念

2. 今日におけるデザインの意義

- (1) 国民生活の充実 (2) 需要の創造及び産業経済の活性化 (3) 生活文化の創造 (4) 創造力の涵養

第2章 デザイン活動の現状

1. デザインを取り巻く創造環境の変容

- (1) 経済社会環境の変化 (2) 技術革新の進展 (3) 国際分業の進展

2. デザイン活動の現状

- (1) デザイン創造機会の増大 (2) デザインに係る領域の増大 (3) デザインの創作主体

第3章 デザイン振興の課題

1. デザインの社会への一厄の浸透

- (1) デザインに対する社会的認識の両極性 (2) デザインの社会への一厄の浸透

2. デザインインフラの整備

- (1) 創造性・主体性を鼓舞するシステムの整備 (2) デザインの創造を支えるネットワークの構築 (3) デザインの保全

3. デザインを通じた国際交流の推進

- (1) デザインを通じた国際交流の意義 (2) 効果的なデザイン交流の推進

第4章 1990年代に向けたデザイン政策の展開

1. デザイン政策の新たな展開

- (1) デザインインフラの整備 (2) グランドデザインの推進 (3) デザインを通じた国際交流の充実

2. 当面の課題

- (1) '89デザインイヤーの提唱 (2) 産業政策措置におけるデザインへの取り組みの強化

第1章 今日におけるデザインの意味及び意義

いま「デザイン」は、経済社会の中で多岐多様な内容をもって語られ、また、これに対する期待もかつてなく大きい。

このような中で、「デザイン」がこの期待にどのように応えられるかが問われている。流動化した「デザイン」の世界の再構築が必要となっている。

本章においては、まず我々が視野の対象とする「デザイン」の概念の整理から始めたい。そして今日における「デザイン」の意義について考えてみたい。

1. 今日におけるデザインの概念

デザインが単に製品の表面的な形態、色彩、模様等の装飾を意味するものではないことは、これまでの当審議会の答申の中でも強調されているところであるが、近年のデザインを取り巻く創造環境の変容は、後に述べるように、デザインに係る領域をさらに大きく拡大している。こうした現状を踏まえ、今日におけるデザインの概念を提示すれば、次のようなものとなる。

「デザイン」活動は、人間の物質的、精神的な諸要求を十分に満足させる調和のある人工的環境を形づくることを意図する創造的活動である。

具体的には、「もの」に期待する諸機能の実現、生活環境への適合、趣味嗜好への合致といった需要者の様々な要求に対し、技術的可能性、経済性等を考慮に入れて、「もの」の表現上の決定を行う活動と言える。

このように、デザイン活動は質的に豊かな生活を求める需要者の要求を供給者へ伝達する役割を担う。デザイナーは、需要者と供給者との間のメッセージを双方向で媒介する「コミュニケーター」とも位置づけられるものである。

デザインに係る領域は今後も変容していくと考えられるが、この需要者と供給者との間のコミュニケーション性は、デザインの普遍的性格として認識されるべきものである。

2. 今日におけるデザインの意義

デザインに係る領域の拡大とともに、デザインの「日常化」が進展している。我々の周りにあるもの全てが、デザインに係りをもつと言っても過言ではない。このような事態は、かえってデザインの意義をあいまいなものとするおそれがある。したがって、デザインの経済社会における意義を明らかにすることは、今後のデザイン活動及びデザイン政策展開の出発点ともなるものである。

今日に置いて、デザインの意義は、次の4点に整理することができよう。

(1) 国民生活の充実

我が国経済社会においては、大量生産・大量消費を特徴とする産業経済の発展を背景として、「もの」の量的充足が急速に進んだ。いま希求されているのは、このような「もの」の充足のうえに立って、「心」を充足する快適で潤いのある国民生活の実現である。このためには、家庭生活の場、労働の場、公共的な場等生活環境の各方面の改善が必要となっている。

「デザイン」は、我々の生活に「利便」を供するだけでなく、我々の生活に「安らぎ」を与え、「色採り」を添え、「風あい」を醸い出す。例えば、美しく調和のとれた居住空間及び公共空間は、人々に休息を与える。オフィス環境の改善は、人々の豊かな発想の源泉となる。コンパクトで洗練されたオーディオ・ビジュアル機器は、生活空間の制約を解放する。携帯型テーブルプレーヤーは、若者のライフスタイルを変化させる。モニュメントのライティング(景観照明)は、人々にその歴史を想起させる。我々の幸せな生活の実現は、幅広く製品から環境まで「デザイン」を抜きにして語ることはできない。

(2) 需要の創造及び産業経済の活性化

優れたデザインが提供されたとき、そこに感動が生じる。この感動が社会に共鳴するとき需要が創造される。今日、デザインの供給者たる産業は、経営戦略として、このような需要構造の特質を直視した新製品開発及び新規事業展開を迫られる。このような認識、一部の業種、一部の企業において既に当然のこととされている。しかし、多くの企業において、この認識は未だ十分のものとなっていない。

円高の進展、製品輸入の増大の中で厳しい競争環境の下に置かれている我が国産業経済の活性化の方策として、研究開発等とともに「デザイン」は重要な役割を果たすこととなる。「21世紀産業社会の基本構想(昭和61年5月26日、産業構造審議会総合部会企画委員会報告)」は、我が国の産業構造の進むべき方向として、「創造的知識融合化」による産業のニューフロンティアの拡大を指摘している。知的創造活動の所産であるデザインは、その重要な要素を構成するということができる。

(3) 生活文化の創造

過去我が国は、異質な「文化」の導入に弾力的であった。そして、この「西欧的」な文化が大衆消費社会の中で定着、発展することにより経済的な豊かさを享受することができた。

いま、「心」の豊かさを充足する上でも、また、国際交流を進める上でも、新たな我が国固有の文化の発展が期待されている。

デザインは物的、技術的価値を人間生活上の価値に変換する役割を担っており、デザインされた「もの」は、需要者と供給者のコミュニ

ニケーションの結晶である。それが、社会に普及し、「様式」として伝承されていくとき、我が国固有の「生活文化」として昇華していくものである。

歴史の中で評価される「デザイン」創作活動の厚みと、そして、これを尊重する「社会的基盤」こそが、我が国の「文化的アイデンティティ」発展のために必要となっている。

(4) 創造力の涵養

1990年代、さらには21世紀の日本を支えていくものは「創造性」である。技術革新から我々自身の身の回りの生活における工夫まで、創造力こそが今後の我が国経済社会の発展の源泉となる。

その中で、人間の「創造性」を本質とし、その「構想力」をもって生活及び産業に働きかけ、その充実を図るデザインの視点は不可欠である。この場合において、デザインの創作者及び供給者のデザイン活動における「主体性」が創造性を生む原動力となると言っても過言ではない。

他方、デザインは、その提案に共鳴する需要者の存在によりはじめて社会的価値を得るが、この需要者の「主体性」ある選択が創作者の創造を刺激するという効果も看過すべきではなからう。

第2章 デザイン活動の現状(省略)

第3章 デザイン振興の課題(省略)

第4章 1990年代に向けたデザイン政策の展開

1. デザイン政策の新たな展開

第1章において、デザインの意義を(i)国民生活の充実、(ii)需要の創造及び産業経済の活性化、(iii)生活文化の創造及び(iv)創造力の涵養の4点に整理した。これら4点の意義の認識は、デザインを、単に利便的な創作と認識するのではなく、経済社会に広く、深く係り、また、時代の遺産ともなる「知的資源」としての認識を深めるよう示唆するものでもある。

我が国の国際化が進み、我が国のデザインの成果物が世界中に浸透していることも踏まえ、世界に誇れる日本の個性あるデザインの創造を支える政策の展開が必要となっている。

このような認識の下に、第3章の「デザイン振興の課題」に的確に対応する政策が検討されるべきであるが、就中、次の視点が重要である。

(1) デザインインフラの整備

① 総合的なデザイン振興体制の充実

本来、デザイン政策の対象は、「デザインを創作する人」、「商品化し、これを供給する人」、「これを使用する人」、「これをつなぐ人」等多面かつ広範であるが、デザインに係る領域の拡大の中で、デザイン政策の多面的性格はますます強まっている。デザイン政策は、消費者行政、中

小企業政策、技術振興政策、地域振興政策、環境政策、知的所有権保護政策、教育政策、文化政策、公共事業等と密接な関係を有するものである。

このようなデザイン政策の多面的性格を踏まえ、特に次の点に留意する必要がある。

(i) 第一に、(財)日本産業デザイン振興会をはじめとするデザイン振興機関は、デザインに係る領域の拡大に対応する総合的なデザイン振興体制を整え、その中でコーディネート、コンサルティング機能を強化することが期待されるが、デザイン政策としても、これを支援していく必要がある。

(ii) 第二に、通商産業省内のデザイン振興体制も、今日のデザイン政策に対するニーズに十分応えうるような体制にしていくことを考慮する必要がある。

(iii) 第三に、デザイン政策と教育、文化政策等他省庁政策との関係の密接化を踏まえ、関係省庁間の連帯の強化を目指すことが期待される。

② 創造支援拠点の整備の支援

地域においては、地域のデザイン振興のため、さらには、より大きな見地からデザイン全体の振興のため、「デザインセンター」設置の動きがある。このような動きは、デザインの「創造支援拠点」と評価されるものであり、その実践的活動に対し、全体的な立場から指導・協力するとともに、必要な支援を行っていく必要がある。

このようなデザインセンターは、デザイン関係者の意識の融合、醸成を図るコミュニケーションターミナルとして機能するとともに、デザイン研究、デザイン教育、デザインの国際交流等デザイン振興之課題解決への貢献が期待される。また、地域のインキュベーション施設(企業の孵化を支援する施設)へのデザインの位置付け、デザインの共同利用設備に対する支援等も必要である。

③ 「デザインシティ」の育成

今後のデザイン振興において「地域」が重要な役割を果たすことが期待され、かつ、地域の産業、生活、文化、施設等の多面的なボトムアップが期待される状況で、これらのデザイン振興を個別的に図るのではなく、「デザイン」というコンセプトのもとに総合的に考えるアプローチが効果的と考えられる。地域の構成要素が「デザイン」というコンセプトのもとに統合されたとき、個性豊かで、住み心地の良い「デザインシティ」が実現する。

「デザインシティ」の実現のためには、具体的には、地域を構成する産業においてデザインの導入を推進することは勿論、デザインの創作を刺激するような「文化財」の蒐集、「祭」に象徴される人々の交歓の活発化、伝統的な「工芸」の活性化等地域文化の高揚を図ることも必要である。地域を形づくる公共的な施設や商店街等のデザインを改善し、

調和のとれた美しい景観を実現することも重要である。より根本的には、地域に居住する人々の「心」の中にデザイン意識が根付くことが必要である。地域におけるこのような「デザインシティ」実現に向けた努力を支援することも、デザイン政策の視点として重要といえよう。

④デザイン保存の推進

デザインの保全を推進する上で、デザインの創作者、供給者及び需要者のデザイン保全意識の高揚を図ることが基本となることは言うまでもないが、デザイン保全のための制度も重要な役割を有する。雑貨等の分野における模倣品の輸入が増加する中で、「意匠法」、「不正競争防止法」等の制度の積極的活用が必要となっている。意匠法に関しては意匠登録出願の早期審査・早期審理の導入及び意匠制度の利用を容易化するためのサービス体制の強化が既に実施又は準備されているところであるが、今後とも問題の実態に応じ、広く制度のあり方の検討が要請されよう。

特に、GATTウルグアイ・ラウンドにおいて、「知的所有権の貿易関連側面」として、各国知的所有権保護制度のあり方と水際や国内における知的所有権侵害商品の規制のあり方が協議されている。我が国としては、この協議に対し、制度のあるべき姿を構想しつつ、積極的に対応することが必要となっている。

勿論、我が国として、発展途上国における知的所有権保護制度の整備に係る経済・技術協力の要請に対しては、積極的に対応することが必要である。また、我が国の「輸出品デザイン法」をモデルとした制度の整備を発展途上国に提案することも有効である。

(2) グランドデザインの推進

いわゆる「テクノポリス法」、「リゾート法」、「民活法」等の規定により、魅力ある地域づくりのための開発が加速されている。また、「関西学術研究都市」、「関西新空港」、「東京湾横断道路」、「東京湾臨海部開発」等大規模な開発計画が提案され、現実化しようとしている。

このような地域開発に際し「ランドデザイン」の視点が特に重要であることを改めて指摘しておきたい。

ランドデザインは、長期的視点に立った構想と粘り強い実践の積み重ねにより実現できる。

(3) デザインを通じた国際交流の充実

効果的なデザイン交流を推進するため、特に次の点に留意する必要がある。

第一に、発展途上国に対するデザイン協力を量的にも質式にも拡大する必要がある。専門家派遣、研修生受け入れ等に際しては、相手国の実情に応じた協力を実施し、また、協力をその場かぎりのものとしなため、事前の準備、事後のアフターケアへの配慮を忘れてはなら

ない。さらに、NICs諸国の中にはデザイン振興のための政策協力を求める声もあり、今後このような協力を活性化させる必要がある。このような協力を確実に行うため、適切な教材の整備も必要となっている。

第二に、国際的な人的交流の円滑化を図るための支援も検討の必要がある。例えば、デザイン振興機関の連帯のためのコンサルティング、人的分派に係るマニュアルの整備等が必要となっており、また、交流のための資金の確保も重要である。

2. 当面の課題

(1) '89デザインイヤーの提唱

第3章で提起したデザイン振興の課題を克服し、また、前節で提案した1990年代のデザイン政策を実現するのは、必ずしも容易ではない。

これは、創作者、供給者、需要者等デザイン関係者の協力と支えの下に可能となる。このため、デザイン関係者の意識の国民的盛り上がりも期待される。この場合において、1970年代のデザイン政策の出発点として「73年デザインイヤー」運動が展開されたことが想起される。

かかる例にならい、1990年代のデザイン政策の出発点として、1990年代を準備する年であり、また世界デザイン会議等デザインに関する大規模な事業が企画されている年でもある「昭和64年度」を「デザインイヤー」とし、この期間において、デザインのみならず、デザイン振興機関、地方自治体、経済団体、企業等のデザイン関係者がそれぞれの立場から1990年代のデザインを考える機会を設けることは、極めて時宜を得た運動といえることができる。

(2) 産業政策措置におけるデザインへの取り組みの強化

従来、税制上の措置や金融上の措置等の産業政策措置におけるデザインの位置付けは、必ずしも明示的ではなかった。

しかし、産業経済のソフト化、サービス経済化の進展とともにデザインの重要性が増大する中で、デザインの産業政策上の位置付けが変化してきている。

第一に、デザイン業は典型的な「内需型産業」であり、摩擦を生じにくい「国際協調型」の産業としての期待が高まっている。

第二に、デザインは、円高の進展等の下で厳しい環境の下に置かれている中小企業が新規事業展開を図る上で重要な要素となることが期待されている。

第三に、地域経済の活性化のための産業立地政策においては、研究所、情報サービス等とともに、デザイン業の地域における集積を促進するための施策の充実が求められている。

このような、産業政策におけるデザインへの取り組みの強化は、「デザイン界」が一步飛躍し、将来、我が国産業経済において一定の役割と責任を果たす「主張のある」存在となることを期待するものでもある。



DESIGN EXPO '89

シンボルマーク制作者/永井一正
 (日本グラフィックデザイナー協会副会長)
 3つの円は「世界デザイン博覧会」のテーマである「ひと・夢・デザイン」をシンボライズしており、人、地球、宇宙というスケールの広がりを意味している。人類の夢をデザインすることで、地上の文化を築き、はるかな未来宇宙への無限の可能性を願う祈りがこめられている。

世界デザイン博覧会 名古屋

世界デザイン博覧会が計画され、開催地の名古屋では着々と準備が進められている現在、その計画の概要を博覧会協会発行の小雑誌から抜粋し紹介する。

なぜ、今世界デザイン博覧会なの？

だから、今世界デザイン博覧会なのです。

●注目されるデザインの役割

いま、身近かに感じます。生活・社会・経済など私たちをとりまわっているさまざまなところで、大きな変革が進みつつあります。量から質へ、ハードからソフトへ、モノから心へ。こうした激しい動きの中で、もっとも注目を集めているのが「デザイン」です。人間と科学技術、産業経済から社会環境までを結ぶデザインの役割が、改めて問われているわけです。(後略)

●日々のくらしから街づくりまで

日々の生活を見廻してみると、私たちは朝から夜まで、デザインにとりかこまれているといっても過言ではありません。デザインへの正しい眼と高い意識を持つことは、これから快適な生活や環境を考え、つくりだしていく上でも、大切なキイ・ワードとなるはずです。(中略)

都市にいまもっとも求められているのはデザインでしょう。それはこれからむかえる情報化時代にあって、都市の方向を大きく左右するのは、その都市のイメージであるからです。(後略)

●デザイン運動の新たな出発点に

こうした流れの中で開かれる「世界デザイン博覧会」の持つ意義と果たす役割は、社会的にも、経済的にも、また文化的にみても極めて大きいのです。この世界デザイン博覧会は、単なるイベントのみで終るものではありません。それは、市民にそして企業や行政の中にも、デザインの眼を育てていく大きな運動でもあるのです。通産省は、昭和64年度を「'89デザインイヤー」として、デザインを通じて生活と産業と文化のあり方を、あらゆる分野で問いなおそうとする運動を全国的に展開する計画を進めています。(後略)と述べられており、今日のデザインの役割と、今後の

デザイン運動が社会に果たす効果を期待し、このデザイン博覧会の意義をまとめています。

次に「デザイン博覧会」開催の概要と、基本理念、各会場計画をまとめてみました。

開催概要

名 称	世界デザイン博覧会
テ ー マ	“ひと・夢・デザイン”都市が奏でるシンフォニー
会 期	昭和64年7月15日(土)～11月26日(日) 135日間
会 場	名古屋市内 名古屋城会場、白鳥会場、名古屋港会場、計56ha
目標入場者	600万人以上
主 催	財団法人世界デザイン博覧会協会
承認団体	国際インダストリアルデザイン団体協議会、国際インテリアデザイナー連盟、国際グラフィックデザイン団体協議会
後 援	通商産業省、総務庁、経済企画庁、科学技術庁、環境庁、国土庁、法務省、外務省、文部省、厚生省、農林水産省、運輸省、郵政省、労働省、建設省、自治省、全国知事会、全国都道府県議会議長会、全国市長会他、関係機関及団体多数

基本理念

人はデザインする動物であり、人類の歴史はデザインの歴史でもあります。より美しく、より楽しく、より快適な生活。人間の夢はデザインを通して形となります。私たち人間は、先人がつくりあげたデザインを文化の形で摂取し道具技術を用いながらデザインを進化させ、新しい生活を創造してきたのです。高度情報社会への転機に立ついま、工業化社会がもたらした機能性、利便性を基礎に人間の感性と情熱を開花させること、そしてデザインの心をもって新たな人間・自然・技術の共存関係をつくりあげること、そこに現代のデザインに課せられた使命があります。

いま私たちは、新たな生活文化を世界に提案しうる都市へ、デザインというヒューマニズムに支えられた創造的な都市へと、脱皮をめざしています。そして、世界に問いかけます。新たな生活文化の創造に向けてデザインはいかな



マスコットキャラクター制作者／川中寛人
(大阪府・グラフィックデザイナー)

飛び交う情報を触覚のアンテナで巧みにキャッチし、それを訪いで人の心の中にある夢をデザインする創造の子として生まれた。愛称「デポ/DEPO」は「DEGN EXPO」の略。公募により決定。

る力を持ちうるか、今世紀に蓄積された知恵と技術をデザインはいかに統合しうるのかと「世界デザイン博覧会」は、人間の世紀の幕開けにあたり、世界の共演者とともに奏でる人間賛歌の一大シンフォニーです。

会場計画 三つの会場で開催され、それぞれの会場が個性溢れる計画の下に特徴あるテーマを設定し、展示、催されます。

■名古屋城会場 (19ha)

会場テーマである「歴史からの発見」に沿って、天守閣と緑とに囲まれた環境の中にパビリオンを点在させ、回遊的に「デザインの蓄積」を発見するという会場構成とする。日本の伝統的な格子をイメージさせる「□」の形態、なじみやすく、やすらぎが得られる「木」という素材、豊かな自然の緑を増幅する「緑」の色彩、自然の中で仮想的に場を仕切る「幕」という演出要素、これらのデザインモチーフを用いて、デザインのすばらしさ、楽しさ、奥深さ等が感じられる会場をつくりだす。

本丸ステージは、能舞台風のせりだしのあるステージを設け、各単独企業館、遊びの広場、遊びのヴィレッジ等が計画されている。

■白鳥会場 (26ha)

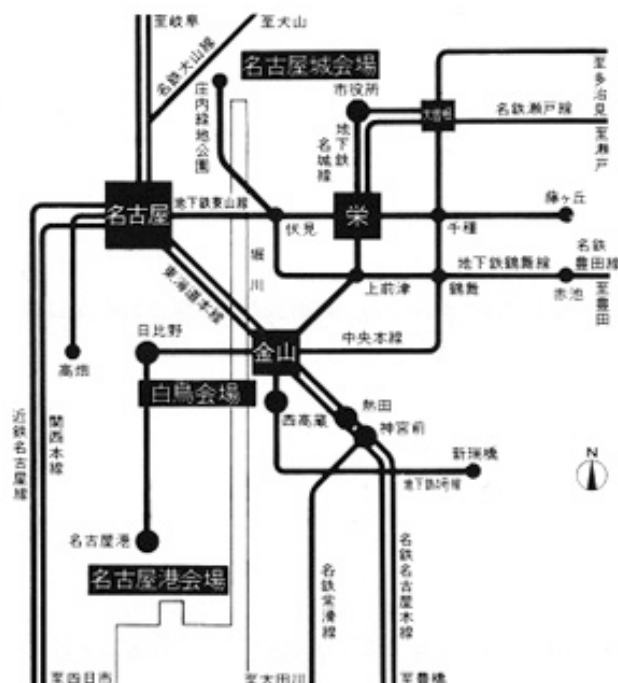
会場テーマは、「21世紀との遭遇」である。ここでは「○」「金属」「柱」をデザインモチーフに使い、無機質な質感の人工物の中で「デザインの可能性」に遭遇するハイテックな雰囲気の世界の形勢をめざす。堀川の流に沿った南北の軸線を設定し、デザインモチーフを生かしたパビリオン等を連続的に配置して、新しい都市の風景を形成する。北から南へゆくに従って、人工的ゾーンから自然的ゾーンへと変化してゆく景観の中で、都市と自然の新しい関係が発見できる会場とする。

テーマ館「白鳥センチュリープラザ」を恒久施設として設け、「発想とデザイン」、「技術とデザイン」、「生活とデザイン」、「夢・未来とデザイン」の4つの視点からテーマ展示を行う。デザイン・ギャラリーでは各種デザイン団体による提案展示があり、メインホールでは世界デザイン会議が開催される。各企業の単独パビリオンも数多くあり、国

際交流ゾーンでは外国館、ワールドバザールも設けられている。

■名古屋港会場 (11ha)

会場は南に開けた海を陸側から既存倉庫群が取り囲んでおり子供たちには冒険心を、大人にはノスタルジアを感じさせる夢とロマンの場所である。「楽しさへの旅立ち」をテーマとして海辺の環境を舞台に行動的でカジュアルな感覚の世界を構成するため、「△」「布」「青」「網」をデザインモチーフとして用いる。デザインモチーフの形、色などを通して港の将来像を予感させる会場形成を目指す。南極観測船「ふじ」を係留し、ボートハウス、旅立ちの広場、ファンファンランド、大観覧車なども設けられており、夢と遊べる遊園地を計画している。



※会場は都心部にあり、公共交通機関での来場に非常に便利な場所です。

世界デザイン会議'89 名古屋



世界デザイン会議

世界デザイン会議シンボルマーク
 制作者/岡本滋夫
 (愛知県・グラフィックデザイナー)
 未来に向けて発信するカプセルをイメージした円筒の組合せは「モノ」と「モノ」、「人」と「人」のつながりを意味し、世界デザイン会議から21世紀へのメッセージとして人類の限らない発展と宇宙まで伸びようとするデザインムーブメントを表現している。

基本テーマとその解題

かたちの新風景…情報化時代のデザイン

口紅から機関車まで、キャッシュカードからインテリアビルまで、私たちは、さまざまなモノに取り囲まれて生活しています。そしてその背景では多くの人々がモノづくりに携わっています。そこでデザインは、これら無数のモノに美しいかたちを与えること、そのことを通じて、生活を新鮮化するという役割をもっています。

モノのかたちの基礎には一時代の社会があります。一個のプラスチック製のコップ、一台の電話機の造形にも、現代の仕組みと技術の到達点、人々の生活観が集約されています。この意味でモノのかたちは一つの総合、デザインによる総合です。経済の力、技術の力はデザインを通じてはじめてかたちを獲得し、家庭で、職場で、街角で、美しい風景を描き出すことができます。

いま、情報化時代を迎えて、これらモノのかたちの基礎が激しく揺らぎ始めました。経済の国際化、産業構造の転換、人口の高齢化に代表される社会構造の変化など、その良い例です。新技術は相次いで出現し、若い世代を中心に生活様式の変貌が著しい。過剰なまでのモノの世界。そこに渦巻く膨大なエネルギーを文化へ結晶させる仕事はデザインです。ありあまる可能性を現実にするうえで、今日ほどデザインの力を必要としている時代はありません。

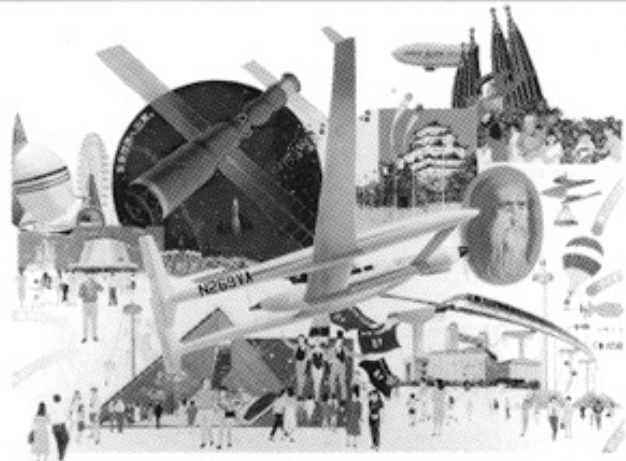
世界デザイン会議では、これからの「かたちの新風景」をテーマに、デザイナー、建築家、エンジニアのみならず、行政、経済、産業、都市づくりなど社会の各分野の人々、一般市民を集めて話し合われます。そこでは、モノの視覚

的イメージやデザイン情報の交換にとどまらず、モノのかたちに表現されてくる生活と社会の未来像が同時に交換されます。個々のモノのかたちを通して、それらが集まって作り上げている風景、全体としてのモノの文化に視点が置かれます。

「かたちの新風景」の萌芽は、名古屋に集まる人々の心の中にあります。会場をキャンパスとして、来るべき時代を創るデザインの可能性が多彩に描き出されること、そこに会議への大いなる期待があるのです。

■概要

会議名称 世界デザイン会議 ICSID'89NAGOYA
 開催時期 1989年10月18日～21日(会議) 10月22日・23日(総会)
 開催地 名古屋市「白鳥センチュリープラザ」他
 テーマ かたちの新風景—情報化時代のデザイン
 関連事業 '89 デザインイヤー・世界デザイン博覧会
 主催 世界デザイン会議運営会
 構成団体 (財)日本産業デザイン振興会、(社)日本インダストリアルデザイナー協会、(社)日本インテリアデザイナー協会、(社)日本クラフトデザイン協会(社)、日本パッケージデザイン協会、(社)日本グラフィックデザイナー協会、愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所、中部経済連合会等
 以上が「デザイン博覧会」の概要ですが、堺デザイン協会会員の皆様も機会を作り参加し、世界的なイベントを盛り上げ、成功を祈ろうではありませんか。(文責金子誠之助)



ダッハらんど'89大阪

「オランダフェスティバル'89大阪」実行委員会事務局は去る9月21日付でダッハらんど'89大阪・実施計画(案)を発表しました。今号はその概要から会場構成をお知らせします。予想観客数50万人。事業規模10億5千万円。

エントランスゾーン／花は躍る／花と緑とで彩るオランダ情緒あふれるスペース・風車の花壇・トピアリーと草花の花壇
・カフェテラス



未来ゾーン／日蘭テクノ最前線／日本とオランダの最先端技術をもとにくりひろげるサイエンス・ファンタジーの世界
パビリオン—ファンタラマ・ドーム(仮称)・未来帆船「テ・リーフテ号」



地元名店街(東側)／地元の名産品を販売する店のストリート
花のプロムナード(西側)／オランダからの輸入チューリップ第一号を咲かせる



過去ゾーン／「波濤万里を越えて」／本催しのテーマ展示。堺市博物館を全面的に使用し、オランダからの秘宝と国内での
収集品による日蘭交流史・西洋との出会い・蘭学ものはじめ・開けゆく日本・日本再
発見

交流のスペース
／堺市博物館の地階域で展開。メインとなるのはオランダ絵画展・オランダ何でも相談
室—日蘭サテライトコミュニケーション基地・交流学生・伝統工芸職人・大道芸人



花のプロムナード(南側)／オランダからの輸入チューリップ第一号を咲かせる・立体花壇—博物館前



現在ゾーン／そのままオランダ／オランダの街角の再現。ストリート・オルガンの演奏をバック音楽にしてオランダ・
パフォーマンスを展開・オランダ街風景・昭和の出島



地元名店街(東側)　　／地元の名産品を販売する店のストリート
花のプロムナード(西側)／オランダからの輸入チューリップ第一号を咲かせる・花のステージ



イベントゾーン／オランダ広場　　／セレモニーとさまざまなイベント・開、閉会式・花の音楽隊(65日間)・国際イベ
ント・児童対象イベント・平日イベント
水辺のカフェテラス／どら池沿いに設けるいこいの場

第3回国際デザインキャンプ'88松本に参加して

高木 外・森 達男

・はじめに

長野県松本市で財団法人国際デザイン交流協会主催の「第3回国際デザインキャンプ'88-松本」が8月5日6日両日開催され、高木外、森達男が、参加した。

さわやかな高原の街信州松本で経済、社会、文化等の問題をデザイン関係者のみならず、産業界、市民の方々など幅広い参加のもとに「デザインという視点で物を考えよう」という集いである。日常業務に追われがちな私達としてはこの機会に「デザインとは」を改めて問い直して見たいという思いで参加し又期待に答えてくれたと思う。私見も多分に入っていると思うが両日の状況の一端を報告し何等かのご参考になれば幸いである。



・オープニング

「国際デザインキャンプ'88-松本」の開会は松本音楽文化ホールでの「歓迎のバイオリン演奏」で幕をあけた。鈴木メソッドとして国際的に著名な才能教育研究会の3才から中学生までの40名の子供達のバイオリン演奏は800名の参加者に強い感動を与えてくれたと共に、松本という風土と歴史(あたたかな人情を育ててきたところ)を私達は深く感じた。

・未来デザイン

基調講演にはSF作家の小松左京氏を迎え「デザインの未来」をテーマとして「自然界にあるデザイン」を見ると、地球、宇宙レベルのデザイン「形態」をつくっていることを発見する。未来デザインクリエーションと共に、すでにあるデザインを読みとり再構築することにより、未来の「かたち」を創造することが出来るのではないかと述べ「蜂の生

態」や「空海のデザイン」を例にあげ、SF作家らしいデザイン感であり最後にデザイナーは「工人」や「転業」としての位置から「知的スペシャリスト」として変貌を遂げて行くべきであり、デザインとして取り上げる範囲を思い切って広めてほしいとし、小松左京氏にとってデザインは素晴らしい「相補的協力者」であり、探求するための良き伴侶たり得る人達であると結んだ。

・イタリアデザイン最新事情

世界的に著名なデザイン雑誌「DOMUS」の編集長を経てこの度新しく発刊された「L'ARCA誌」の編集長として活躍しているチェザレ・M・カザッティ氏による記念講演である。氏は編集長として「花粉で実をつける蜂」であり大洪水の時代に「価値あるもの」を守る役割を背負ってきたと自分の立場を述べられ、イタリアのデザインの変遷の課程で、デザイナーはイタリアの国内需要(経済性)やマスの消費者に対する無視から、企業家から見捨てられた時代のこと、又再度デザイナーが企業と結びついた狭い分野での実用性の少ない美しい商品の追及とその延長線上での「ポストモダン」論、そして「ポストモダンは死んだ存在である」と厳しい指摘は印象深く、今後デザイナーは本質的なものへの挑戦すなわち「発進する技術分野への挑戦」「荒廃し続ける自然に対する挑戦」こそデザイナーの課題であると説いた。

・レセプション

夕刻会議を終え恒例行事になっている池田三四郎氏設計による「居酒屋しずか」を借り切ったのデザイン・文化談話が始まる。今会った人と愉快地又真剣に話ができて、なぜか皆が親友に思えるのもデザイン仲間だからのことかと思う。又学生諸君の参加も多く、酔がまわったの学生筋の元気な声は頼もしく感じた。

・分科会

2日目は松本市内の勤労者福祉センターで 1.産業デザインを拓く 2.生活のトレンドを読む 3.祭りをデザインする 4.デザインごころを育てる 5.町並み探検の5つの分科会に分かれ開催された。「産業デザインを拓く」のセッションに参加したのでその内容を紹介する。についでざいん編集長の森山明子さんの司会で、プサス㈱、三起

商行㈱、日本エフディ㈱の代表がパネラーとして、「生活」「ソフト」「感性」をデザイン開発キーワードとしての時代にデザインマネジメントはどうあるべきかを話し合った。印象に残った語句を羅列すると「デザインはやりすぎると、良いデザインの基本を永く生かしたいからだ!」「売りたいから売らないのだ」「売り場を見るな、生活を見よう」「きのう、今日、明日は違う朝令暮改のすすめ」「食品開発には①風味②風景③風土の3つの風が重要だ」「魂のこもった商品で勝った」「デザインは売れば勝ち、売れて顔が出来る」など、パネリスト各氏はヒット商品を世に出している躍進する中堅企業の代表であり私見ではあるがデザインを基軸として「攻撃は最上の防御なり」を展開する経営活性化のディスカッションであったと思う。



・市民フォーラム

「人間はだれでも太鼓を持っている……心臓の鼓動は太鼓と同じ」御諏訪太鼓保存会宗家小口大八氏の言葉である。この保存会有志による雄大かつ荘厳な演奏は今後のデザイン活動に対する激励として感動した。

・おわりに

松本は周囲を北アルプス、上高知、美ヶ原にかこまれた城と民芸に象徴された城下町、人工20万の観光都市ですが、松本の町を紹介する種々のパンフレットが用意され、訪れる人に松本の情報を提供して、松本の町を知ることが出来る素晴らしい都市です。観光都市に有りがちな俗な土産物店もなく、自然に融合した街並み民芸の本物志向が作り上げたたたずまい、それが松本独自の情緒を作り出している。この質の良い生活スタイル、簡素で品ある感性は、民芸の強い運動が松本に根づき、そのリーダーである池田三四郎氏の一つ

のものを自分の手で作るだけでなく、企画し、全体を構成し、プロデュースするという民芸運動の環境運動を含む実践を見ることが出来大いに感動してきました。



デザインの随想

ステンレス立ち飲み

川崎 浩

この店の店は、心身共に健康で「何を食べてもいつもおいしく載けます」という者でないといけない。小鳥の餌みたいなものを摘んで、薄手の杯でチビチビというのはお呼びでない。細長い店に不似合いなぐら立派な巾の狭いステンレスのカウンターが10メートルばかり通っている。勿論椅子などはない。私が勝手にステンレス立ち飲みと称するだけで、暖簾には商店と染め抜いてある。

生(ナマ)もの、焼きもの、酢のもの、揚げもの何でもあるのは珍しくないが、ここでは、平目の薄造りと、生肝にたっぷり刻みネギをかけたのがあつたりする。それだけで二合は飲めそうで、大きな鯉のテンブラか、具がたくさんで溢れんばかりの粕汁が受皿に乗って出てくる。それに夏でも角が黒くなった煮すぎた関東煮(ダキ)がある。

いなせでキビキビしたサービスは合わない。それを喜んだりする客のためか、無愛想を売りものにするのはもっての外であるが、饒舌は食べ物には向かない。兄弟らしい中年の二人と、どちらかの連れ合いらしい女(ヒト)が一人、勘定の時にはちゃんと「まいとおおきに……」と言う。肝心の値段、健啖を誇る君がいかに鯨飲馬食しようと、二千円を超えることはむづかしい。

なぜか手洗に、少し汚れたタオルか一本下げてある。いやならポケットのハンカチを使えばよい。

企業が創る

織じゅうたん (JIS呼称)

村上敷物株式会社

下記の (製法のちがいによる分類) の通り、時代の変遷に伴う各種の敷物が開発されてきました。堺・今昔に記載の堺式織通は天保2年(1831年)頃より製織され、明治時代には米国等へ輸出が盛んでした。

現在堺附近で生産されている織物は・ウイルトンカーペット(シングル)(ダブルフェース)・アキスミンスター・フックドラッグ・タフトッドカーペット等です。

当社のシングルは昭和3年 広中織機が大阪住吉地区に輸入された時にはじまり、戦後国産機が開発されたことにより、昭和21年から米国に大量に輸出、外貨獲得に貢献しました。昭和37年米国の輸入関税が21%から40%に引上げられ輸出は激減いたしました。幸いオリンピック、万国博等の開催によるホテル建設ブーム等、国内需要が増加してことなきを得ました。昭和40年ごろよりシャトルのない大量生産型のタフトマシンが増設され、タフトッドカーペットの生産、需要が飛躍的に増加しました。一方ウイルトン

カーペットは最盛期に比べ半減しましたが、①伸縮が少ない②通気性がある③小ロット生産が出来る④柄が鮮明、等の織り組織の特徴、またウール使いが多いため、豪華さ、弾力性、焦げ跡が消しやすい、等の利点がありインテリアの重要なフロアに使用されています。



ズームアップ

ステーションギャラリー

田中賢次



南海本線 浜寺公園駅に、去る8月9日浜寺公園ステーションギャラリーがオープンしました。

この駅舎は、全国でも数少ない明治の木造建築物で、SADA・No8の表紙にもなり、SADA事

業報告「近代建築を見る会」の中でも紹介されております。

ギャラリーはその駅舎の南側部分約60平方メートルで、今まで、駅員の宿舍や物置として使用されていた部屋を改修したものです。

室内は白を基調とした華麗なつくりで、部屋の隅には復元されたマンテルピースがあり、床の幾何学的なパターンとともに、開業当時、乗客の一等待合室として使われていたことをしのばせます。

地域の人達や各種サークル、団体等にも広く開放されており、駅舎とともに、何か明治のロマンを感じさせる可愛いギャラリーです。

開館時間は10時から午後8時までで、月曜日は休館日となっています。

堺・今・昔

和晒・注染

老 健一

350年の伝統を持つという泉州晒は、石津川が清流であった頃、河内・和泉の綿作地帯でできた布を、天日晒（天然晒）を何回も繰返し、精製した和晒として高い評価を受けたようである。この和晒に関連して染め・織りの技術が発展し、明治以降の繊維産業発展の地盤を造ったことは自然の成り行きであったと言えよう。和晒を染める注染という、模様の部分だけに必要な色染めをする方法は、1944（昭和19年）ごろ大阪の空襲で疎開してきた浴衣や、手拭を染色加工する業者によって始められたという（堺市経済局工業課刊・堺の伝統産業より）堺の他の伝統産業に比べると、新しい分野であるともいえる。もっとも注込染（つぎこみ染め）という表現で、遠く江戸時代に行われた技法であるというが、最近の工程では検反一生地巻一糊置（型紙にスクリーンを貼った上に防染糊をへらで置く）注染（糊置を24時間おき乾燥させた後用意の染料を、2反分重ねた生地に注ぎ、防染糊のない部分を染める）一水洗い一乾燥といっ



た手順で完成する。

最近の着物離れが特に若い人達に多く、注染の新らしい用途を開拓する必要があるのではないだろうか。例えば、浴衣地のカーテンなどインテリアを中心に、デザインを現代風に創作してモデルルームを作るなども、一つのアイデアではないだろうか。

注染の浴衣地（堺の伝統産業・堺市経済局工業課刊より）

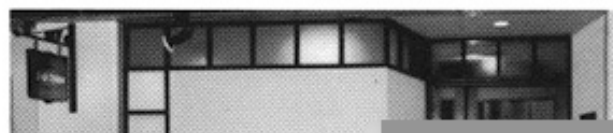
E-スポット

フランス料理の店「^{アラ} à la table」

山 崎 晶

堺にうまいものあり。この度はフランス料理の店「アラ・ターブル」。2年ほど前、堺東駅高島屋駐車場ビルから西へ5分ほど、国道26号線の1本手前の通りにオープンした可愛い、お店。マダム小世本が心こめてサービスする。「la table」はテーブルの意。「まあ おかけやす」といった気分で気遣いお料理を召上っていたが、

ご同伴でどうぞ。ランチタイム11:30→14:00 ディナータイム17:00→22:00 水曜定休。堺市南花田口町1-1-21
TEL 0722-22-1008



堺デザイン協会第5回総会

日時 昭和63年5月27日(金)

場所 ホテル南海さかい

開会 午後6時

- ・岡村事務局長より出席状況報告
会員47名中出席21名委任状提出者16名で過半数を確保し、総会開際の成立を確認。

- ・議長挨拶 川崎理事長

議事

第1号議案 昭和62年度事業報告及び収支決算報告

- ・上野理事より事業報告
- ・森理事より収支決算報告
- ・老監事より会計監査報告

第2号議案 昭和63年度事業計画(案)及び収支予算(案)

- ・高木理事より事業計画(案)の説明提案
- ・森理事より収支予算(案)の説明提案

その他

- ・山崎理事よりSADAニュースについて報告
- ・岡村事務局長より会員名簿発行の報告
- ・同氏より大阪デザインセンター季刊「情報」No.73に出稿の報告
- ・堺市制100周年記念事業推進委員会園田昌昭氏が出席され「グッハランド'89」開際について概要の説明があり、合せて成功への協力を要請された。
- ・新入会員の泉谷 茂さん、八木高光さんの挨拶
- ・田中信雄さんから会員増員計画と収支予算案との関連について質問——森理事より予算案にかかわらず会員拡充に努力することを返答。

閉会 7時30分

引続き懇親会に移り、来賓に堺市前助役市川幸次南大阪地場振興センター副理事長をお迎えして夜のふけるまでにぎやかに懇親の時を過ぎた。

昭和63年度 事業計画(案)

設立5周年の前年に当り、組織運営の基盤をかため、一層の会員の拡充につとめるとともに、記念事業の準備を進める。

①研修事業

- セミナー開催……………1回
- 見学会の開催……………1回

②広報事業

- SADAニュースの刊行……………2回

③普及、啓発事業

- デザイン審査、選定活動、その他

その他の事業

- ・SADA 5周年記念事業の準備をする
- ・堺市制100周年記念事業に協力する
- ・デザイン関係団体との連携、協力を強める
- ・SADA会員相互の親睦を図る懇親会を開催する

奈良デザイン協会(NDA)との交歓会

かねてから他の地域デザイン関係団体との交流がのぞまれて来たが、この度奈良デザイン協会(NDA)との接触が実現した。去る8月26日、「奈良しるくろーど博」でにぎわう奈良の街で、SADA理事の有志とNDA役員会の方々による第1回の交歓会が催された。当日SADAの参加者は川崎理事長以下金子、岡村、高木、上野、山崎の6名、



昼の間は「しるくろーど博」を見学し、日暮れよりNDAで設営された料亭“いずみ”に集合。NDAは片山陽次郎会長をはじめとする役員8名の面々。初めての出会いとは思えないほど活発に話し合いが始まり、各々の地域でのデザイン活動の状況、将来の展望など、夜の更けるのを忘れて語り合った。そろそろ終電が気になりかけたころ、再会は堺でと約束して無事おひらきとなった。NDAの皆さんありがとうございました。

新会員のプロフィール

■泉谷 茂（いずたに しげる）

写真の道に入って早や30年になります。

人は一人で生きてはいけません。いろんな人々とのかわり合いの中で、自分というものを知って、磨いて、そして高めてゆくものです。そのためには、人の思いを感じとれる感受性、お互いを尊重できる協調性が大切。

いろんな人々との出逢い、ひとつひとつが心のトレーニング。こうやって自分の生きる世界、つまりフィールドを広げることによって内面の魅力が加わってゆきます。

SADAへの入会を機に、自分のフィールドをさらに広げてゆきたいと思えます。ふれあいの中で、写真と同じように新しい自分を発見することを期待するものです。よろしく。

勤務先 ㈱プロフォトみどり 〒592 堺市浜寺公園町2丁146 TEL0722-61-0367

自宅 〒592 堺市浜寺諏訪森町東3-284

TEL0722-64-9203

■館野 羊一（たての よういち）

堺市若松台に居を移して15年になります。よろしくご指導下さいますよう。

勤務先 ㈱高島屋建築事業本部 設計屋 〒556 大阪市浪速区日本橋3丁目5-25 TEL06-632-3091

自宅 〒590-01 堺市若松台1丁目1-705

TEL0722-91-8616

■吉田 豪男（くよしだ ひでを）

この度、理事長、事務局長のご紹介を頂き、貴会に入会させて頂き有難うございます。私は戦中に現住所に生れ、現会社に入社、転勤転居なく今に到っています。趣味は高輪になって始めたゴルフに熱中しています。借金しても誰とでも、どんなゴルフ場でもまいます。酒とカラオケは駄目ですが、趣食好みと自分で思っています。今後共よろしくお願いいたします。

勤務先 ㈱フジカラーサービス 大阪営業所 フォトディスプレイ営業部 〒550 大阪市西区北堀江1-22-2

TEL06-534-0461

自宅 〒590-01 堺市畑161-1 TEL0722-92-6588

■株式会社 フジカラーサービス 大阪事業所(賛助会員)

代表者 所長 山崎篤治

新しいフォトメディアをお考えになりませんか？

ウインドディスプレイ、屋上広告塔、各種展示場……に。カラー写真は情報時代の重要なコミュニケーションとして、そのウエイトはますます高まっています。

フジカラーサービスは、一コマの写真から、“フォトキャンバス”、“Gカラープリント”などのフォト空間を鮮かに創る製品まで、多彩なメディアを演出するトータル・フォトプランナーです。

この度、賛助会員として皆様方のお役に立ちたいと思っております。 TEL 0722-27-3501

表紙の周辺

■思い出の渚

昭和40年頃、ワイルド ワンズの歌った「思い出の渚」という歌をご存知だろうか。私にとって、浜寺の海はまさに「思い出の渚」であった。今は運河と、対岸に立並ぶ臨海工場が思い出を消し去ってしまっている。そこに関西新空港へ向けて高速道路が建設中で、その断面が、巨大な造型物のように、あるいは怪物のように吾々を見下している。山崎さんがこの写真を撮った時、秋の夕日に輝く西空は限りなく美しかった。

安永一典